

【入所時意思決定支援】

施設に入所するのかもしれないか、そんな話が持ち上がっているときには、家族にとっても本人にとっても、そして日中を支える養護学校や通所福祉事業所にとっても大きな危機を迎えている時だ。

大概、本人は行動障がいを呈していて、他害や自傷をしていたり、器物破壊をしたりして、関係者にとっては、その行動障がいの理由も分からず、有効な解決策も無いまま何年かの時がすでに経過しているということが多い。

このような状況の時、もちろんみんなが困っているわけなのだが、一番困っているのは、実は本人であることは言うまでもない。みんなを一番困らせていると思われている本人が一番困っている人なのである。

他人を傷つけないのに、傷つけてしまう、物を壊したくないと思っているのに壊してしまう、イヤなこと、耐えられないことがたくさんあるのに、それが伝えられない、自分の感じていること、考えていること、分かって欲しいのに、ちっともそれが伝わらない…、そんな苦しみの中に本人はいる。

したがって、施設入所するかもしれないかの相談は、確かに形は、入所する、しないという見える結果を出すための相談ごととしてスタートするのだが、本当の目的は大きな苦しみのどん底にいる本人をそこから救い出すための人生相談の場とすることである。

その相談は、どんなに知的障がいも重くとも、どんなに自閉症スペクトラム障がいも重くとも、意思があり、意思決定ができる人である、という原理原則からスタートする。

本人は、自分が置かれている状況をよく理解できていることが多い。そして、それを打開するためにどんな方法がいいか教えて欲しいと考えている。ただ、それを表現できないだけだ。

最近あった入所のケース。男性 20 才。父親が病気で倒れた。入院をしている。お母さんは、仕事や遠く離れた祖父母の介護に追われている。自分には、止むに止むれぬドライブ欲求や DVD レンタル欲求がある。母はあっちもこっちもと大

忙しだ。いつも疲れているように見える。

私は話す。「お母さんのこと、助けてあげたいと思うよね。自分でできることであればなにかしてあげたいと思ってるんだよね」「ちょうど事業所で、気持ちを伝えるという練習をしているって聞いたよ。上手に伝えることができるようになってきたって職員さんたちが褒めていたよ」「朝のラジオ体操、出るのイヤだなあってカード選べたんだって。そうしたらその時間、とても穏やかに過ごすことができるようになったんだって」

彼は真剣な顔で私を見つめている。

「そうやって自分の気持ちを伝えて自分の人生を自分で決めていくことを自立っていうんだよ」「どんな人でも、これは障がいがあってもなくても、自立することは人生の目標なんだよ」「君も自立に向かって歩み始めているっていうことなんだ」

「こんな話、今まであんまりしたことが無いと思うけど、今の気持ち、表情カードで教えてくれる？」

彼は、〈うれしい〉のカードを選ぶ。

「ありがとう、私もこの話を君と真剣に話せて、とてもうれしい」「実は、お母さんから相談があったんだ。今の家の大変な状況を教えてくれながら、これからのことを考えると、私があっちもこっちも面倒見ながら、残りの時間で君のことを見ていくよりも、入所施設というところで自分らしい人生を歩んで行って欲しいって」「君は、どう思う？」「君もこのままお母さんに甘えていても決して良いことがないって思い始めていたんじゃないかな？」彼はゆっくりと〇のカードを指さす。こんな調子で、本人参加のケア会議がその後 2 回開催され、施設の見学の経験を経て、いよいよ本人の気持ちを確認しようというケア会議が開催された。

「翌々月の 1 日に入所というのはどうでしょうか？」相談支援担当者の声に、関係者がまだ目配せをしていたその時に、彼が突然行動する。手を挙げて「はい」と言っただけ。「よろしくお願ひします」と言ったのだ。「あれ？彼にこんな自発語あったっけ？」「初めて聞いたよね」

一番状況を分かっていて、一番腹を決めていたのは、彼だったのである。